レビュー

【書評】

Alex M. Nading
Mosquito Trails: Ecology, Health, and the Politics of Entanglement

California, University of California Press, 2014
288p., 29.95 US $

桜木　真理子*

『蚊の痕跡――生態、健康、もつれあいの政治』と題された本書は、ニカラグアの都市サンディーノにおけるデング熱へのヘルスケアについて描いた民族誌である。

デング熱はネッタイシマカなどの蚊を通して感染する熱帯病で、WHOが指定する顧みられない熱帯病のひとつに数えられている。発熱、頭痛、筋肉の痛み、発疹などを引き起こし、重症化すれば死に至る。

本書の問題関心は、デング熱という疾病やそれに対してグローバル規模で実施される感染症対策が、地域の歴史やランドスケープ、人々の経験、蚊や人間のライフサイクルや気候といった生態学的要素とどのように関わり合っているかにある。

本書の主役はブリガディスタ（*brigadista*）と呼ばれるヘルスケア・ワーカーである。彼らはサンディーノ市でデング熱予防活動を率いるいわば実働部隊であり、その９割は地元の女性たちが占める。本書は2006年から2011年にわたり、著者がブリガディスタと活動を共にし、彼らの語りに耳を傾けた記録から構成されている。

序章で著者は、医療人類学者マーガレット・ロックのローカル・バイオロジー概念を援用し、グローバルヘルスが疾病を管理・制圧する一方向的な図式を避け、土地固有の歴史やランドスケープがいかに人々と蚊との関係を形成し、身体的経験やローカルな感染症対策と結び付いているかを問う。それゆえ、本書の射程は感染症対策そのものよりむしろ、感染症をめぐって関係する人間と非人間の生に置かれている。

ここで重要となる分析概念が「もつれあい（entanglement）」である。本概念は、「折り解き（unfolding）であり、しばしば思いがけず連結や類縁、対立や敵対などによって人々や動物や事物を、各々にお互いの世界へと持ち込むようなものである」（p.11）と定義され、同時に、物質的、時間的、空間的条件であるとも述べられる。著者はダナ・ハラウェイの理論的影響に言及しており、疾病の社会的／生態学的側面の一方に偏重しがちな議論の傾向を、ハラウェイが強調する物質的な異種混交性によって乗り越えようとする。人間と非人間との物質的な相互作用は、ニカラグアという特定の場でいかに現れているのだろうか。著者は「もつれあい」概念の導入を通して、グローバル／ローカル、公共／私的、蚊／人間を隔てる境界線を掻き乱し、それらの複雑かつ雑多な連結（attachments）としてデング熱のありかたを捉えようと試みている。

本書評では、各章の内容を概観し、最後に本書の意義について議論する。

第１章では、サンディーノ市のインフラストラクチャー（以下インフラ）の構築と公衆衛生対策の歴史的関係が論じられ、デング熱の伝播がニカラグア固有のランドスケープに埋め込まれたものであると示される。

1980年代から1990年代にかけ、中南米では都市化が急速に進み、これによって人間とモノの大規模な移動と、思わぬ副産物としてのデング熱がもたらされた。北米から中南米へ輸入されるゴミはニカラグアにとって貴重な資源であったが、輸入されたゴミ（とりわけ中古タイヤ）を通して運ばれた蚊によって、デング熱は国境を越え瞬く間に中南米へ拡大した。都市化、労働者の移動、そして未発達なインフラが、1980年代以降のデング熱の流行を加速させたのだった。

衛生問題と直結するインフラの整備をめぐる責任の所在も時代と共に推移した。自然災害によって幾度も破壊されたインフラの整備は、市民らが集団的な活動を通して獲得する公共的なものとみなされてきた。しかし90年代以降は一転して、ニカラグア保健省（MINSA）のデング熱予防活動は、デング熱の責任をコミュニティではなく各家庭・個人に帰属させた。蚊の発生防止を目的としたインフラ整備は、個人主義化した公衆衛生政策のもとで、政府ではなく住民個人の選択と決定の問題として再設定されたのである。

第２章では、ゴミをめぐる蚊と人の二重の依存関係が明らかにされる。上述の通り、蚊の棲家となりやすい水やゴミの管理がデング熱対策の要となる。MINSAはデング熱予防が清潔な都市環境の形成と地続きであると考え、「清潔なる市民権」を人々に要請した。しかしながら、ゴミに対する人々の認識は

*大阪大学

MINSAのそれとは異なった。第１に、サンディーノ市の人々にとってゴミは貴重な収入源である。リサイクル可能なゴミは各家庭で保管され、ゴミ収集業者がそれを買い取り、ブローカーに転売するという循環構造が成立している。第２に、当のゴミ収集業者やブローカーは、彼らの仕事こそが町の清潔さを保つことに貢献する「道徳的」活動だと自負している。このアイデンティティによって、彼らは自らの振る舞いを正当化し、ネガティブな社会的イメージを切り返す。

以上の問題について、著者は「寄生」という語を用いて考察する。デング熱の流行は、人が作り出す環境に依存する蚊、そしてグローバル経済、消費経済、地球温暖化の影響下でゴミ収集ビジネスに依存する都市生活者という２つの「寄生」関係が折り重なって生じる現象だとまとめられている。

第３章から第４章では、より具体的なブリガディスタの活動と彼らの情動が焦点化され、とりわけ女性であること、母であること、家庭で暮らすことの意味が考察される。第３章では、科学的知識の伝達という領域にとどまらない彼らの活動について述べられる。蚊は１週間ほどで成虫へと成長するため、蚊の増殖を防ぐためには最低でも１週間に１度、家の周りのゴミやゴミ箱、桶などの水や水たまりを掃除することが理想とされる。この役目を期待されるのは各家庭の女性たちである。ブリガディスタたちが科学的・権威的な生物医学的知識と女性たちの日々のリアリティの調和を図る際には、道徳的・ジェンダー的要素が見て取れると著者は指摘する。キリスト教徒が多数を占めるブリガディスタが住民に対し行動変容を促すとき、その指導は自ずと道徳的な色合いを帯びたものとなる。彼らが家庭訪問指導の際に発する言葉には、生物医学的要素に加え、飲酒・性的関係の規律を守るといった道徳的要素が織り交ぜられ、善き社会生活への自己変革へと人々を導こうとする。これによってブリガディスタたちは、科学的・公衆衛生的要請を宗教的美徳と混合し、デング熱対策と社会的な領域との統合を行うのである。

次に、女性たちにとって家が私的・公的要素を兼ね備えた両義的な空間であると論じられる。貧困や家庭内暴力にあえぐ女性たちの苦しみと自己変容の物語は、家の状態やメンテナンス、あるいは家の荒廃としばしば関連づけられる。その意味で、家は単に外から遮断された空間ではなく、社会関係や感情と深く結び付いた場でもあると示唆される。

さらに、ブリガディスタの活動は、ケアや学びを介した蚊との相互行為でもある（第４章）。彼らは蚊のライフサイクルや生態系を学ぶことで、ありふれたランドスケープを蚊の視点から捉え直し、蚊の溜まり場（*foco*）を突き止める。彼らはこうした探索に伴う喜びの感覚を口にする。それだけではない。蚊の生態系の学習、とりわけネッタイシマカが彼らと同様の「シングルマザー」という属性を有していることは、蚊に対する愛着や喜びといったケアの感覚を彼らに抱かせる。蚊に対するケアや情動は、蚊の排除を企図するMINSAの戦略に含まれない要素であったが、ブリガディスタたちにとって蚊の排除と蚊をよく知ることは矛盾しない。むしろ、日々の実践を通じて人と蚊の「物質的･記号的なつながり」を見出すことは、より効果的な対策につながる。著者はこうした情動を伴う蚊の探索を「生態学的美学（ecological aesthetics）」と呼び、昆虫媒介病対策には、例えば大規模な殺虫剤の散布のように、有害とされる種を人間から引き離すといった支配的な方法よりも、人、媒介動物、ウイルスの関係を深く知り、我々がどのようにこれらの関係のなかで生きていくかを模索する方法の有用性を強調する。

第５章から第６章では、公衆衛生政策と地域における知識の調整やフィードバックについて議論される。第５章では、グローバルヘルスがどのように地域の文脈に沿って実行されているかが論じられる。

1990年代以降、グローバルな疾病コントロールは住民主体の活動を重視するようになった。近年におけるデング熱対策の主題は「監視」と「参加」である。科学的専門家の仕事は、人間の病気、居住、そして蚊を、データ収集を通して体系的に「監視」することにあり、そしてその実現には、習慣形成や自発的な蚊の管理への人々の「参加」が重視される。

この「監視」と「参加」を媒介するのは誰／何であるのか。本章で描かれるのは、地域の実践家（医師、疫学者、昆虫学者、ブリガディスタ）が人々のローカルな知識や物語をデータへと変換する巧みな実践である。デング熱に関する噂話や記憶は、感染症対策プロジェクトの立案者にとっては障壁として映る。他方で、地域の実践家たちにとって、人々の語るデング熱のドラマはむしろ積極的に現場でのデータ収集に活かされる。その代表的な例が市民レポートの*denuncia*（スペイン語で「苦情」の意）である。*Denuncia*は生物医学、政治的姿勢、感情などが渾然一体となった物語であるが、疫学者は*denuncia*の訴えを手掛かりとして生物学的な不調を読み取り、データへと翻訳する。すなわち実践家にとってのデータ収集とは、ローカルなドラマに自らも参与することを意味している。

第６章では、デング熱対策が生態学的、物的、政治的に多様な時間性と共に動いていると述べられる。デ

ング熱は蚊のライフサイクルやニカラグアの気候と連動しつつ、雨期にあたる８月から11月にかけてピークに達する。ただし、「デング熱の緊急事態」は気候と蚊のライフサイクルだけの問題ではなく、（しばしば遅れがちな）予算・物資・人員の配置、標準化された診断技術の整備、ヘルスケアに関する政治的方針といった、長期スパンの技術的・経済的・政治的問題も含まれる。人間・非人間を含む複層的かつ整合しない時間性は、デング熱をめぐる環境と政治を相互に構成し続ける。

結論で著者はグローバルヘルス研究に対する批判を展開する。インフルエンザやHIV/AIDSなどの新興感染症は、これまでグローバルレベルの健康問題として議論されてきた。しかし、グローバルな感染症対策を包括的に論じる先行研究は、身体の個別性や場の歴史的・政治的文脈を看過し、公衆衛生対策の画一的素描に陥る傾向にあると著者は批判する。それに代わり提案されるのは、疾病が埋め込まれた固有の文脈を重視し、人、病原菌、媒介虫、そして環境相互の絶えざる「生成」関係――もつれあい――への注意である。疾病を環境的外部要因が一方的にもたらす災厄として捉えるのではなく、疾病の背後に蠢く人間・病原体・媒介物、そしてそれらを取り巻く知識の痕跡を丹念に辿ること（trailing）を通して、われわれ人類学者は感染症と病原体、媒介動物と共に生きる人々のリアリティの掌握が可能になると本書は締めくくられる。

タイトルに含まれる「痕跡（trails）」の通り、本書の物語は人間と非人間が構築する記号的かつ物質的な「痕跡」を辿るように描かれる。緻密な情景描写を通してサンディーノの荒涼とした都市風景が立ち現れ、デング熱が風景に埋め込まれた歴史や物質的要素と共に存在していることを思わせる。

本書の学術的意義はまず、マルチスピーシーズ民族誌と医療人類学を巧みに結合させた点にある。マルチスピーシーズ民族誌のアプローチは、エスノグラフィの人間中心主義を脱し、動植物や菌類、微生物などの非人間と人間との創発的な出会いと多様な関係のありかたを民族誌的に描き出そうとする。近年ではアナ・チンの翻訳本の刊行も記憶に新しい［チン 2019］。ここ十数年の間にマルチスピーシーズ民族誌は徐々に蓄積されてきているが、これらの観点を医療の文脈から論じた研究は途上段階である。他方で、著者が結論で述べているように、感染症はまさしく人間と非人間（例えばウイルス、細菌、寄生虫など）が「もつれあう」現象であり、それゆえ感染症研究はマルチスピーシーズ民族誌のコンセプトと共鳴するところが多い。そのなかで本書は、デング熱という感染症問題を通し、ニカラグアの人々にとって日常的な存在である蚊と、インフラ、社会経済、家庭生活、女性たちの複雑な関係性を丹念に描いた優れた先駆的作品である。病原体や媒介動物と人間の相互依存、敵対関係、もしくは共存関係を明らかにすることで、本書は疾病、身体、環境相互の生成を描出する視座を提供している[1)]。

ただし、マラリアやアフリカ睡眠病などの昆虫媒介感染症に関する医療人類学的研究に関するレビューは十分であるとは言い難く、評者にはこれらの研究蓄積に対する本書の視座の独自性が不明瞭に思えた。その結果として、結論部における新興感染症研究に対する批判も茫漠とした議論に留まっている。デング熱と似た対策および措置が取られる感染症の研究との比較によって、本書の学術的意義はより鮮明に浮かび上がるのではないだろうか。

もっとも、それによって本書の意義が損なわれるわけではない。以上で述べた課題が今後の研究に引き継がれることを期待している。

注

1）本書の著者Nadingは、健康・疾病をめぐるヒト－動物関係について*Medical Anthropology Quarterly*誌にて特集を組織するなど［Brown & Nading 2019］、今日までマルチスピーシーズ民族誌と医療人類学の共同的研究を牽引し続けている。

参照文献

チン，A. 2019『マツタケ――不確定な時代を生きる術』赤嶺淳訳 みすず書房。

Brown, H. & A. M. Nading 2019. Introduction: Human Animal Health in Medical Anthropology. *Medical Anthropology Quarterly* 33（1）：5–23.

髙橋絵里香著
『ひとりで暮らす、ひとりを支える――フィンランド高齢者ケアのエスノグラフィー』

東京，青土社，2019年
263頁，2,200円（＋税）

福井　栄二郎*

本書は著者、髙橋絵里香の２冊目の単著となる。本

*島根大学　email: fukui@soc.shimane-u.ac.jp